



大方あかつき館報

第20号
2014年3月発行

あかつき

対談・「特攻について語る」

この対談は、二〇一三年度・特別企画展「散花〜二人の特攻隊員〜」の関連企画として開催されたものです。

日時…2013・9・1(日)13:30〜15:30

会場…大方あかつき館レクチャーホール

対談者

鍋島 康夫氏

(元高知さんさんテレビ報道制作局長)

大西 正祐氏

(「二人の特攻隊員」著者)

司会…山沖 幸喜(上林院文学館長)

—高知さんさんテレビ制作「最初の特攻、最後の特攻」(五〇分)を観賞後、対談。

司会 まず、特攻の番組制作や本を出されるきっかけから。



鍋島 「聞き南溟の彼方へ」からお話しさせていただきます。これは旧海軍高知航空隊で訓練用に運用しておりました機上作業練習機「白菊」が悲劇の特攻を沖繩海域で繰り広げたという史実に基づきまして、五二人の若者たちが、南溟、南の海に消えて行ったということを描いたドキュメンタリーでございます。

高知航空隊のこと、特に白菊特攻は資料が残っていないなかったせいか、あまり取り上げてこなかっ

たんですね。私たちは映像メディアとして、いろいろな関係者取材しながら、口の重い大正世代、沈黙の世代とも言われる皆さんにアプローチしました。最前線で戦ったけれども戦争のことはあまり語らない、大正のころから昭和の初めぐらいに生まれた、つまり最前線でこの戦争を戦った皆さんの重い口を開ける、そういう役割を若干果たせたんじゃないかなと思います。

大西 旧海軍の人たちの同窓会があつてですね、そこに白菊特攻隊の生き残った方が、その時に猪口力平という第一神風特別攻撃隊を命じた側にいる人に話を聞くんですね、「自分は特攻隊に行っただ」と。そして、猪口力平は「どこの特攻に居たんだお前は?」、「高知の白菊特攻隊です」と言うんですね、彼が何を言ったかというところ、ああ、あれか。あれは実験特攻だったんだよ」と。これは本当にひどい話で、練習機で百機突っ込ませて、本土決戦のためにどれだけの戦果を挙げたのかそれを試した。私もちょっとびっくりして、こんなひどいことで若者たちが殺されていったのかなっていうこともあつてですね、そのことをブログに書きました。すると鍋島さんがそのブログ読んで連絡をくれ、それで交流が始まったんです。そして、宮川正さんはうちの母親、早咲出身ですからちやうど近所だったのもあつて、そのことをずっと調べているって言ったなら、じゃあそれを本にしたらどうかっていうことで、いろいろ調べて本にしたんです。

鍋島 「聞き南溟の彼方へ」っていうのは、スピードが一八〇キロくらい、新幹線のこだまの速度く

らしいか出ない練習機による特攻を扱っています。二五〇^キ爆弾、二五番と言うんですが、その爆弾を二つも釣り下げて沖繩海域に飛んでいくんです。そういう悲劇の特攻だったんですけれども、恐らくほとんど叩き落されたと思うんです。

その中で、突入しようとした敵の駆逐艦を目前に機体が横滑りして着水してしまい、敵艦に救助され、奇跡的に生きながらえた横山善明という操縦員を取り上げました。恐らく私もテレビ局が静岡まで行ってカメラとマイクを向けなければ、この方は自分の特異な戦争体験をそのまま語られることはなく、埋もれてしまっていたと思うんです。特攻したけれども生き残ってしまったわけですね。それを七、八〇歳になってもまだ恥と思いがら生きている世代があったんです。

司会 鹿児島に取材に行かれたと聞きましたが。

大西 正さんにしても哲さんにしても、遺書が全く残っていない。どういう思いで行ったのかってというのが非常に関心が高かったですね。

一応大西中将が行った航空特攻、零戦による特攻を決めたのは十月十九日ということになっています。

実は海軍全体は特攻作戦やるっていうのは、もう遙か昔に決めていたわけですけども。十九日の晩に二〇一航空隊に行って大西中将が「大和」らの戦艦部隊がレイテ湾に突入する。それについては飛行機が邪魔だから、相手の航空母艦の甲板を叩いて飛行機を飛ばなくする。そのためには、今あるフィリピンのこっちの飛行機では、数が足りない。だから、爆弾を抱いて突っ込ませようかということ提案をして、それが認められたとい

うことです。

その後いろんな見方があってですね、その特攻隊員たちは「やった。これこそ俺たちが死に場所を得たんだ」というふうに言ったという特攻を命じた方たちの手記もあります。それから、そうじゃない手記もある。そのことを知っているのは、鹿児島島の濱崎さんという方、二〇一航空隊の零戦乗りですから、その方の話が聞けるということがありました。

司会 そこで元特攻隊員濱崎さんに会い、当時の話をいろいろと聞くことができたのですが。

鍋島 濱崎さんのお話では、簡単に言いますと特攻を命じた側の記録として「若者たちは目をキラキラ輝かせながら国の危機に殉じて喜んでというか、自らを完全に納得させて、特攻兵となっていた」というふうに描かれているのに対して、命じられた側のその場に居た宮川正さんたち最初の特攻隊、予科練の十期生たちの反応は、やはりその内容がずいぶん違うものだったという事です。

大西 本当に肉声とは何かというのは、その場に居た人に聞かないと分からないっていうのは、この鹿児島旅行でもですね、濱崎さんがその場に居て「うおおい」といやいやながら返事をしたっていう十期生たちの話が、本当に印象に残りました。同時に、もう一つ印象に残っているのは、十期生たちはあんまり行きたくないのに、宮川さんだけは生き活きと「俺はこういう角度で突っ込むんだ」ということを隊員の前で一生懸命語っていたっていう話です。

司会 その中で出た、久納中尉の話とは。

鍋島 それは新撰組雷撃隊の護衛任務での出来事です。魚雷を装備した天山艦攻、当時としてはまだ新鋭の艦上攻撃機だったんですが、天山十一機を四機の零戦で護衛して、レイテ方面に展開する米軍艦船に攻撃をかけたんです。昭和十九年十月十九日と記録されています。

ところが、グラマンの急襲を受けて、天山艦攻は十一機の内十機が撃墜されました。それから、護衛の零戦も、隊長の久納中尉、二番機の濱崎機以外は火を噴いて撃墜された。

そういう事件があった後、ほうほうの体でマバラカットへ戻って来た濱崎一等飛行兵曹が聞いたのは、尊敬する中尉は別の基地へ行って、どうも特攻に行かされたらしいと。そんな馬鹿な話があるかと言って憤慨したという話です。

そうした話を全体的に見わたしてみると、「特攻の始まり」時点でも、自主的かつ自らの意志で特攻したとかいう、命令した側が語っているようなものではなくて、どうやら護衛戦闘機隊長として、天山艦攻十一機を守りきれなかった。その罰として、どうも特攻に回されたんじゃないかという濱崎兵曹の言い分、それがあながち誇張や作り話とは思えないような、そういうフィリピン戦線の厳しいせっぱつまった情勢というのをつぶさに感じたし、そうした中で宮川さん、野並さんの特攻死もあったんだな、という感触が鹿児島旅行取材でつかめました。

司会 大西さん、『二人の特攻隊員』の本を出されて、新たな発見やつながりが生まれたそうですね。

大西 本を書いた後にですね、実は元土佐山田町長さんからお手紙いただきました。「実はこの水無瀬勇というのはうちの兄貴と拓大で同じ柔道部でやってたんだ」ということでお写真まで付けて送ってられました。そして、そのお話の中です。水無瀬さんは拓大に行ってしばらくたってご両親も亡くなり、親しい身寄りもなくなりました。で、学徒出陣となった。ところが誰も見送ってくれる方が身近にいないってということで、ちょうど仲が良かったその土佐山田町長のお兄さんにですね、水無瀬さんが「構わなければお前のところで、一緒に見送ってくれないだろうか」という話をしたそうです。そして、そのお兄さんのお父さんというの、新改村（現香美市）の助役を務められていた方らしくって相談したら、いいよということ。水無瀬さんとその土佐山田町長のお兄さんと二人ですね、壮行会をやってくれたっていう話ができました。

さらに、去年九月に中村の公民館で展示をやってんです。そして、それを見に来られた佐賀の方から「あ、水無瀬がいる。水無瀬だ、水無瀬だ。」っていう声でした。わたしはすぐ訪ねて行って、「何で水無瀬さん知ってるんですか。」って言うのと、「この水無瀬はうちの隣の子や。隣におった子や。佐賀で生まれたんだ。佐賀で旅館をしよう」という話があって、これもちょっとびっくりしました。

ということですね、特攻隊員、旧制中村中のなかで三人。だけど、その三人ともこの旧大方、佐賀。今の黒潮町出身だったんだというのです

ね、これもほんとにあの本を書いてからの新たな発見だったなと思います。



特別企画展

「散花」

～二人の特攻隊員～

8/2～10/30
上林暁文学館

司会 改めて今、戦争や特攻について、どう考えておられるのか、お聞かせ下さい。

大西 彼らのことはほんとにすごいなと思う。けど彼らを賛美しちゃ駄目だというふうに思います。彼らも賛美されることを望んでないのではないかな。自分たちはいやなんだけど、行くという運命を受け入れた。

だから、僕はそんな惨い戦争を強いた、特攻を強いたこと、その国を我々が作った、軍が作ったというけど。その軍を作ったのは、政治家であり、マスコミであり、そしてひいていえば、国民だろというふうに、私は思います。

だから彼らのあの悲劇は、記憶されるべきだ。正しく記憶されて、再びあんなことを起こさない社会なり、自分たちを作るといのが、正確に彼らのことを記憶することになる。そしてそれを、子どもたちにもちゃんと伝えるというのが、今大事なんじゃないかなと思います。

鍋島 特攻の番組を作ったときの私自身の動機で言えば、三〇万人の日本人の命が失われ、一九〇〇万人のアジアの人たちの命が日本の軍事行動の結果失われたこと。このことを日本人としてどのように見るのか。肯定的に見る人もいるかもしれないし、二度とそういうことが起こってはいけなさと反省をこめて総括される方もいらっしゃるかもしれません。が、少なくとも私の取材した事実関係でいいますと、大正の中ごろくらいに生まれた人、それから昭和の初めくらいに生まれた人、つまり戦争の世代、最前線でこの戦争を戦った皆さんは、あんまり語ろうとしないまま人生の最終ステージを迎えているような感じなんです。

今を生きる人間は、やはり何があったのか。で、どのように見ていくか。歴史というのは何なのかということをやっぱり考えていかなければいかんなどと思います。次の世代を見据えて、今をどう考えるか。そういう大事なテーマを私どももいただいております。

司会 時間が来ましたので、これで終わります。

* 編集者の判断で大幅にカット、一部掲載。
対談の全文をご覧になりたい方は、『**大方あかつき館**』ホームページを

特別企画展

『わたしをみつめて』

～中脇初枝・文学の軌跡～

期間… 6/7～8/31 上林暁文学館

2013年度の催し点描

第11回上林暁忌短歌大会

2013年7月27日（日）に上林暁忌短歌大会が、黒潮町保健福祉センターで開催されました。

歌誌「塔」選者で歌人の栗木京子先生を講師に迎え、112首の作品が寄せられるとともに、80数名の参加者がありました。



ただいま開催中！

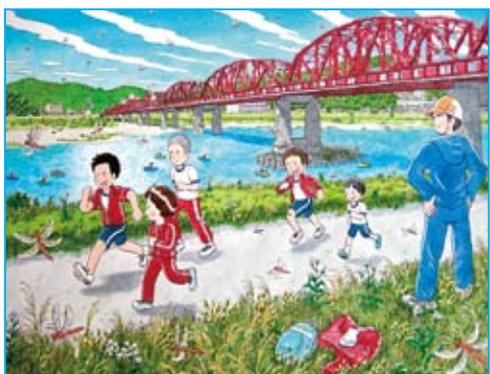
第15回企画展

「光ちよるぜよ！ぼくら」

～横山充男・児童文学の世界～

同時開催：「挿絵原画展」

幡多出身の児童文学作家、横山充男さん。四万十川や中村を舞台に、少年たちの成長物語を数多く書いています。生原稿や本、資料などを通して、横山充男の「児童文学ワールド」を、ぜひ、ご体験いただきたいと思います。



第15回企画展

光ちよるぜよ！ぼくら

～横山充男・児童文学の世界～

挿絵原画展

よこやまみちお・こどもぶんしや

3/1（土）～6/1（日）

上林暁文学館

期間：3/1（土）～6/1（日）

特別企画展

「散花 ～二人の特攻隊員～」

2013年8/2～10/30開催。特攻出撃し、フィリピン沖で戦死した町内出身の野並哲さんと宮川正さんの遺品なども展示。千名を超える来館者があり、大好評の企画展となりました。



観覧者の感想より

- 正さんは小学校の同級生。哲さんは「いとこ」。今ここで会えること、胸のさける思いです！
- 昨年10月に長女が生まれました。戦争について、「自分の子供だったら」と親の立場でも想像するようになり、一層やりきれない気持ちに襲われました。

新米館長奮戦記

～ブログ『クジラのあくび』より～

日々、支えられながら

2014.01.25

「過ぎゆきの歌」清美のモデル、徳島のMさんからお葉書をいただく。『この度、八郎の歌を取り上げてくださるとか。郷土の皆様の文学への熱愛、温かいお心に頭が下がります。「過ぎゆきの歌」は、いちど日活で映画になるというお話が私のところまで来たことがありました。何もかもいまは遠い記憶のなかに消えてしまいました。』

こうした方々に、日々支えられながら文学館の活動ができることの喜びを感じる。ありがたいことである。

ただ、眺めている

2013.12.10

松原のご真ん中に在るあかつき館。この季節になると、落ち葉の中に埋もれる。掃いても掃いても、風に舞う落ち葉を追い払うことはできない。朝、清掃のMさんが掃いてくれる。それでも、午後にはもう落ち葉、落ち葉、ただただ落ち葉。せめて玄関前と駐車場側通路だけでもと、竹箒を持ち出しなんとか試みてはみる。こんな風の強い日は、とくにお手上げ状態。右往左往してはみても、風と落ち葉の戯れに惑わされ、すぐに元の木阿弥。ただただ、眺めている。

